ICT 海外ボランティア会会報
第 104 号

2022 年 8 月 1 日（月）

URL: https://ictov.jimdo.com
EML: info.ictov@network.email.ne.jp

目次

◆特別寄稿
Covid-19 で　当会顧問　東京大学名誉教授　吉田　眞

◆特別寄稿
岩槻日記(19)　当会特別顧問　石井　孝

◆国際交流基金の動き
日本語パートナーズ派遣事業の募集　事務局

◆海外グラフィティ
マルティン・ルター伝説
日本ﾍﾞﾝﾀﾞｰﾈｯﾄ社長　ｴｯｾｲｽﾄ　田上　智

◆海外便り
スペインバスク地方・フランス南西部俳柳紀行(4)
元 JICA ｼﾆｱ海外ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ　北垣　勝之

◆第 14 回 ICT 海外情報ウェブサロン模様　事務局

特別寄稿

Covid-19 で

当会顧問
東京大学名誉教授
吉田　眞

注　本稿は、過去 2 年間に開催された定期イベントの開会挨拶の内容（要約スライドのみ公開）を纏めたものである。

ここ 2 年以上にわたり、世界中の活動が Covid-19 に支配されてきた。

Covid-19 は、社会的動物と言われる人間の行動様式と考え方に大きな制約・変更を強いた。筆者の関係している複数の一般社団・財団法人、学協会等においても、理事会、委員会、イベント類の全てが、最初の蔓延以降オンライン化された。現時点で近い将来にこれが元に戻る気配はない。

2020 年 1 月－6 月の第 1 波の時期には、Covid-19 の蔓延自体も、これで必要になった行動様式の制限・変化の多くも、一時的なものであって時間がたてば Covid-19 は終息して（あるいは少なくとも従来のインフルエンザ並みになって）、生活の大部分は元に戻るものと考えられていた。しかし、2 年半たった現在、第 7 波の到来とウクライナ情勢も重なって、その気配は一向に感じられず、先行きの見通しは不透明である。

本稿では、Covid-19 による社会の変化について個人的に感じていることを述べる。気楽な”雑談”の種としていただければ幸いである。

Covid-19 によって社会の変化はどうなるか

当初は、社会の変化への Covid-19 による活動制約による影響は、以下のように分けられると想定されていた：

１）既に存在する、あるいは伸長しつつある動向（トレンド）が、変わらず継続する、
２）これらが一層増幅・加速される、
３）新たに起きた変化で、将来は元に戻る、
４）将来も元に戻らない　－　これは「新常態（new normal ＊１）」と呼ばれている。

これらの代表例を図に示す（本図は 2021 年 4 月時点のものであるが、大略は変わらない）。

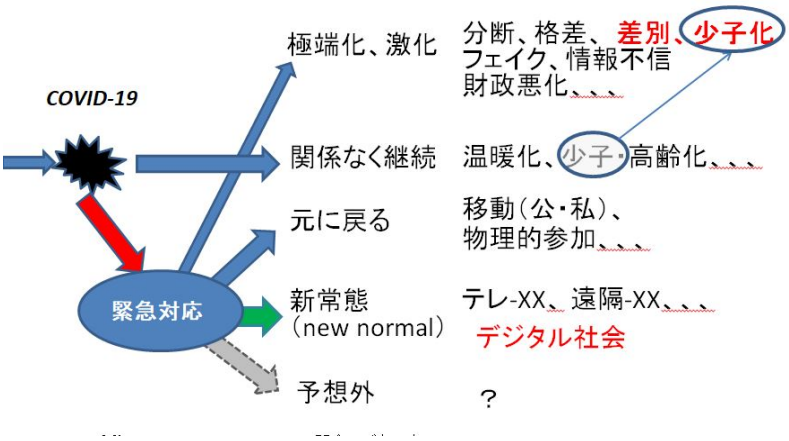


図　社会の変化に対する Covid-19 の影響

１）の例で、自然と人間活動が相互に作用する温暖化の傾向は、人間活動の制限により、一時的に緩和するとも考えられた。しかしながら、実際には進行の度合は増しているようである。

２）については、現状ではほぼ予想通りで、種々の行動制限は、その影響が少ない者と大きな影響を受ける者（弱者）を一層分断して格差を拡げている。また、異なる意見の者（集団）の間での分断は以前から拡大していたが、行動制限で“一見”が減って“百聞”が主になることによって、判断情報が狭隘化して偏り、個々人が考える習慣・力を弱めることになり、一層拡大している。そしてフェイク情報の氾濫・ビジネス化がさらに分断に一層拍車をかけている。

３）での移動制限や物理イベント類の中止・延期などは、解除されてきているが、人数制限、予約制などは継続している。これが完全に「元に戻る」時期は見通せていない。

４）については、テレ・遠隔-XX が「基本」となるという予想された。ICT の進化によって、以前からも遠隔講義、TV 会議、Webinar などが利用されていたが、これらが「常態」となるというわけである。しかしながら、現時点では、従来のリアル-XX を全面的に置き換えるような状況になったとは言えない。例えば、テレワークは第１波で増えたが、その後は全国平均の普及率は 30%前後で変動しており、完全にテレワークとなっているのは、全国で 6%、東京でも 16.4%に過ぎない。（内閣府 2021 年１月）（＊２）

これには、後述のように、人間は本来「動く、集まる、語る、によって創造する」ことが基本であることと、日本社会特有の、一旦決めたら規則と習慣に従うことを変えないこと、によっていると考えられる。

一方で、会議やセミナー類の遠隔・オンライン化については、最初に触れたように格段に増え「常態化」しているといえる。一時は、年次の定例産業展示会や学協会の大会などのイベント類のリアル開催は無くなり完全にオンライン化された。現在はリアルも復活しているが、オンライン開催も多く、オンライン配信を同時・事後に行うハイブリッド方式も基本となっている。

３つのシフトへの対応

社会活動として最も顕著な変化は、否応なしに人間同士の直接接触や物理的なモノを介した接触を避けることが要求されたことである。この観点からの変化は、以下のように３種類ある。（３つのシフト　＊３）

１）コミュニケーションの非対面化　－　オンラインによる（上記４）
２）サービス・モノ提供の非接触化　－　EC、宅配、など
３）省人化・無人化　－　サービス、製造現場

１）については、Covid-19 禍に関係なく、ICT の発展によって、個人的・社会的な交流、ビジネス活動が物理的に直接に会わずとも可能になり、ICT は重要社会インフラとなった。これで個人的な活動でも仕事でも活動範囲が広がり、効率が上がり、社会の範囲がグローバルにまで大きく広がった。〔前節の４）関係の議論〕

２）では、物理的な接触を避けるために、ネットで注文し、配達者との直接接触をせずに指定のボックスや宅配ボックスなどで受け取ることが普及した。ただし、理容・美容などの身体的な処理を伴うものは、接触なしには難しく、ロボット化も当面困難であろう。Covid-19 禍によって一層加速している変化の例としては、物理的なものを扱う店舗数の減少があり、例えば、市井の書店数は急減している、

３）では、非接触化における間接的な接触がさらに進んで無接触・無人化の流れとなる。これは、配達等の人手不足の解消から従来から志向されている。また、無人化の例は農家の無人販売所などで以前からあったが、特に Covid-19 対応で都心でも ICT を活用した新しい試みが行われている。関連記事（＊４）によれば、これも既に停滞が見られ、次の段階を模索しているようであるが、特に問題となるのは、セキュリティの確保とこれに対するプライバシーの保護（このためのデータ保護に関する厳格なルール）である。

人間と社会の在り様はどうなるのか

Covid-19 による人間活動の制約が長期化するに従って、人間そのもの、及びその将来に変化をもたらすものになるのではないかという懸念が生じてきている。

人間は、社会的動物として（五感、肌で感じる）場、空気の物理的共有、他人との協働がその存続の基本であり、個人としても、集団としても社会なくして存続することはできない。人間は、常に他者との関係において、さらに多くの場面で、コミュティ・組織において存在している。

これが、Covid-19 によって、人間活動に直接の物理的な活動が制限されることになり、交流の主要手段が ICT となった。これによって、種々の自由が制限されることになり、本来の人間活動を歪めている。

京都大学の前総長で、現総合地球環境学研究所の山極壽一所長は、以下のように述べている。（＊５）

「人間が社会生活をする上で、3 つの自由があると思っています。動く自由、集まる自由、語る自由です。」「人間の創造性は、異なる人たちが出会って、新しいことに気付くことによって生まれる。出会いがなければ気付きも生まれない。だから、新型コロナウイルス禍で巣ごもりをして、誰とも会わなかったら創造性はゼロになってしまう。情報には出合えるかもしれないですが。」

人間の交流が遠隔でネット経由に限定されることによって、以下の問題が生じる。場の共有は、ディスプレイの枠内だけで、風は流れない、匂いもしない。「声」は「音」となり、音は一定量以下に制御され平板になり、強弱の調子やニュアンスは失われる。

遠隔の画面は、その切り取られた見える範囲だけである。物理的にその場にいれば、自然とその周辺に何があるか、ないか、並行して何が起きているかが、そのままでも視界に入り、首を振れば周囲を確認できる。よそ見して思いがけない発見もできる、ツアーに行ってよそ見したものが想い出に残ったりする。オフィスに居れば、他人が話す声も聞く気がなくても漏れ聞こえてきて、それに反応することもできる。そしてこれで何か新しいことが起きる可能性もある。このことは、コロナ禍以前からよく言われていた。

そして何よりも、ディスプレイの中に写る映像は毎回変わっても、その外側（つまり自分の居る場所）は、いつも同じであり、書斎かせいぜいサテライトオフィスである。その結果、全ての場合で「環境」、「体験」が同じものとなってしまい、どのイベントをどのように経験したかは記憶に残らなくなる。

これらが長期化すれば、以下が生じる：

・「肌感覚、触れ合い、身で知る痛み」 の喪失　⇒　人間の創造性の阻害
・「自分で考える力」の喪失と結果としての 2 項対立　－　on/off, yes/no 以外無しで「余白と余裕」のない世界へ　⇒　社会の創造性の阻害

以上、日頃気になっていることについて述べてきたが、ここ 2 年半の経過を振り返って、かつ第 7 波の到来している現在の状況において、人間と社会が将来どう変わっていくのか、先のことを見通すことは殆ど不可能と言えよう。

本稿では教育への影響の議論はしなかったが、教育への効果は 30 年後に現れると言われる。ここで挙げたような様々な制限・変化が、将来の人間と社会にどのようになって現れるのか、気になる兆候、キーワードについて定点観測を続けていくことは無駄ではないであろう。皆さまの議論の種となれば幸いである。

（＊１）　Wikipedia によれば、もともとは「ビジネスや経済学の分野で、2007 年から 2008 年にかけての世界金融危機、それに続く 2008 年から 2012 年にかけての Great Recession の後における金融上の状態を意味する表現」
https://ja.wikipedia.org/wiki/ニュー・ノーマル

（＊２）内閣府：　第 4 回 新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査：
https://www5.cao.go.jp/keizai2/wellbeing/covid/pdf/result4_covid.pdf

（＊３）「アフターコロナ時代に加速する『3 つのシフト』DBJ の視点：
https://xtrend.nikkei.com/atcl/contents/18/00326/00001/

（＊４）「無人レジ店舗で海外諸国が目指すもの、そして日本の行方」：
https://xtech.nikkei.com/atcl/nxt/column/18/01113/062700032/?n_cid=nbpnxt_mled_itmh

（＊５）「健康社会学者の河合薫氏とニホンザルやゴリラの研究で世界的に有名な総合地球環境学研究所所長の山極壽一氏のオンライン対談　第 3 回
https://business.nikkei.com/atcl/seminar/19/00118/00185/?n_cid=nbpnb_mled_mre

以上

特別寄稿

岩槻日記(19)

当会特別顧問　石井　孝

「DX と内製化」

最近、盛んに喧伝されている DX と、従来から言われている IT 利用の相違は一口で言えば次のようになるであろう。

製品・サービスやビジネスモデルの変革にまで踏み込むのが DX の特徴ではないかと思う。それに対して IT 利用の多くは、既存プロセスの効率化や強化のためにデジタル技術を活用するものであった。

全社の変革に踏み込む DX を推進するためには、経営トップによる明確な目的の策定と、これに対する全社的な実施体制の整備が不可欠である。

この体制に関して現在、「DX と内製化」がクローズアップされて来ているのは当然の成り行きである。製品・サービスやビジネスモデルの変革ということは、その会社自身の大問題であり、こうした問題を社外に頼んだり、任せたりできるわけがない。自分自身で模索し解決しなければならない。これが内製化の真の意義である。

今を去る 37 年前、1985 年の電電公社民営化にあたり、NTT の初代社長に就いた真藤さんは、文字通りこの「DX と内製化」にチャレンジされた。

電話を主体とした通信事業では先々、限界があると見越した真藤さんは、人員さえ整えれば、前途有望なソフトウエア産業への逸早い進出が見込めると判断され、さし向き、電話サービスに関わる商売道具すべてのソフトウエアを内製する部隊をつくることを命じ、将来に備えたのである。

真藤さんの試みは、成功するや、に見えたのであるが、氏の止むを得ざる引退と共に、完全に挫折してしまった。

今想えば、残念至極である。しかしながら、半世紀近くも前に、まさに DX と呼べる発想とそれに対する具体的なアプローチを試みられた、所謂「先見の明」を持たれた先人の経営感覚を色々な角度から改めて研究してみることが今や必須ではなかろうか。

「大変だ！」

昔、通信手段が「電話」一本だった頃、何処かの電話局の交換機がダウンして、一部の地域が数時間通信不能にでもなろうものなら、マスコミなどは「急病人でも出たらどうするか」などと大騒ぎ、電電公社はたたきまくられた。

通信事業の自由化で事業者も増え、技術開発も進み、固定電話に加え携帯電話やメールなどと言った通信手段が豊富になり、今回のような大きな事故が生じても、マスコミはとてもおとなしい。

話は異なるが、ウクライナとロシアの問題も、色々と問題にはするものの、マスコミの取り扱いは、基本的には「他人事」である。

これは、「大変だ！」

問題の本質を探り、どうすべきかを世に問うのが「社会の木鐸」の役目だろう。

「21 世紀の世界」

今回の紛争を見聞きして、ふと思い起こした事がある。
それは 30 年以上も前の事になるが、経済使節団の一員として、ハンガリー、アイルランド、スペイン、キプロスなどの欧州諸国を初めて訪問した時に思った事である。
ヨーロッパ諸国は「幾重にも重なる歴史のうねり」の中に存在するのではないかという事である。
民族や宗教の違いなどからくる数百年の長周期に亘る国家間の因縁の流れ。
それから、昨今においては、EC や EU などと言った各国の共存を模索した中周期的な流れ。
これに加えて突発的な誘因から来る各国の齟齬。
こうした一見性質を異にする幾多の潮流の重なりの上で現実が成立しているように思えたのである。
この点で、我が国は民族的にも地理的にもかなり特異な環境で大変穏やかに過ごして来たのではないかと思えた。
「21 世紀の世界」の大きな特徴はグローバル化であると言われる。政治・経済・軍事等全ての面で地理的有利性は無くなった。
そしてまた、今回の紛争で分かった事は、人間の本性（強欲と残忍性）は、文明の進化によって変わる事は無いという事である。
我が国は、「21 世紀の世界」の中での生き方を、改めて抜本的に見直す必要があるのではないだろうか。

「みずほ銀行」

今朝のフェイスブックに「みずほ銀行」のトラブルに関して、ソフト開発のベテラン技術者である堂山さんが色々と貴重な意見を述べられている。
私が何時もこの問題について思う事は、もし彼の「真藤さん」が、みずほ銀行の頭取として乗り込んで居られたら如何されたろうかと考えてしまう。
真藤学校の三流卒業生としては、真藤さんなら、必ずや、可成り厳しいが、真っ当で且つ先々を見通した正解を出し、それを実行するよう強く求めたと思う。
真藤さんの思想とその行動に関しては、嘗てフェイスブックに数回に亘って投稿させて頂いた。
真藤さんのような実業家が、昨今、一向に見当たらない。如何してしまったのだろう。

「デジタル田園都市構想」

都市構想として、それなりに成功をおさめたものとしては、筑波の学園都市構想やインドのバンガロールなどを思い起こす。
これらは、政府などの行政機関が主導的に実行したものではないのか。
何か新しい試みを行おうとする場合、実施しようとする側に腹案があって、これに対する意見を求めるのが審議会である。「土光臨調」などは、その最たるものである。
さあ、「皆さんどうしましょう」では、百花斉放・百家争鳴、さて、どうなるのだろうか。

国際交流基金の動き

日本語パートナーズ派遣事業の募集

事務局

国際交流基金(JF)は、日本語パートナーズ派遣事業について 9 月 14 日(水)まで募集しています。海外と日本の架け橋になりたい方、(旅行や出張ではなく)海外での日常生活・協力活動をしてみたい方など、奮ってご応募いただければ幸いです。

https://jfac.jp/partners/apply/　https://jfac.jp/partners/event/

タイ	募集人数：30 名	派遣期間：2023 年 5 月～2023 年 12 月
インドネシア	募集人数：20 名	派遣期間：2023 年 8 月～2023 年 12 月
ラオス	募集人数： 4 名	派遣期間：2023 年 8 月～2023 年 12 月

1. 趣旨

幅広い世代の人材をアジアの中等教育機関へ派遣し、現地の日本語教師と日本語学習者のパートナーとして、授業のアシスタントや会話の相手役といった活動をするとともに、教室内外での日本語・日本文化紹介活動等を行い、アジアの日本語教育を支援する。同時に、日本語パートナーズ自身も現地の言語や文化についての学びを深め、アジアと日本の架け橋となることを目的とする。

2. 活動内容

(1) 現地の日本語教師が行う授業への協力
(2) 授業の教材作成等への協力
(3) 授業や課外活動における生徒との交流(日本語での会話、文化活動への協力等)
(4) 派遣先の JF 海外拠点等が実施する日本語教育事業への協力
(5) その他、現地の要望に応じて、地域における日本語学習支援、日本文化紹介を通じた交流活動等

3. 待遇

滞在費(月額 10 万円～14 万円程度)、往復航空券(ディスカウントエコノミー)、旅費等の支給と住居が提供される。

4. 応募要件

(1)満 20 歳から満 69 歳で日本国籍を有する日本語母語話者の方
(2)日常英会話ができる方(英語で最低限の意思疎通が図れる程度)
(3)派遣前研修(約 1 か月間)に全日程参加できる方、等
(注)日本語を教えた経験がなくても良い。特技のある方、人生のキャリアを積んだ方、アジアとの交流に熱意を持った方の応募が期待されている。

海外グラフィティ

マルティン・ルター伝説

日本ﾍﾞﾝﾀﾞｰﾈｯﾄ社長　ｴｯｾｲｽﾄ　田上　智

宗教改革者ルターの伝説は、高校時代世界史の教師から聞いたある逸話から得たものである。ところが、ルーテル神学校名誉教授・徳善義和氏の「マルティン・ルター」を読んでみると若干の相違があることが分かった。

まず、高校教師からは、「友人と二人で野原を歩いていると、突然雷鳴がとどろき、友人が雷に打たれたが、自分は助かった。そこでこころの中でもし助かれば、修道士になると決意した」と。

ところが、前出の著書によると「・・実際に雷鳴と共に稲妻が走り、地面になぎたおされた。・・・死の恐怖の中で思わず『・・・お助けください。私は修道士になります！』」と叫んだのだった。つまりは、友人と二人でなく単独であり、しかもどうやら雷には実際打たれた様子である。つまり、このことが、修道士になり、宗教改革につながる重要な逸話である。法学部の学生であったルターはこの事件で修道院に入ることになる。

ルターは、１４８３年１１月にザクセン地方のアイスレーベンに生まれた。父親は、銅鉱夫から身を起こし、辛苦の末、銅の精錬所を三つも経営する実業家になったが、息子を大学の法学部まで行かせ、将来は宮廷の顧問官かあわよくば宰相か少なくとも同業者仲間の法律顧問にと考えていた。その教え通り、ルターは法学部の学生になった。当時の大学は、神学部、医学部、法学部からなっていたが、神学部が最も格上であった。

次なる伝説は、免罪符である。町の司祭となったあと、日中、街の路上で一人の酔っぱらいを見かけた。「昼間から酔っぱらっていないで、まじめに働け、さもないと神のみ心にそむく」と注意すると「あっしには、これがあるから大丈夫だ」と免罪符を見せた。これには、さすがのルターも衝撃を受けた。免罪符を買えば文字通り、罪が免れるという代物だ。当然、それ以降、免罪符の発行に反対した。

修道士は、爾来一生独身が掟だが、これもルターは破った。１５２５年、ルターが４２歳の時カタリナという修道女と結婚、三男三女を設けた。ルターの名言の中に、当初自分が他の書物でみつけたのは、「人生は歌と酒でござる」というものだが、実際はもっと自由で「酒と女と歌を愛さぬものは、生涯馬鹿で終わる」というものだ。ルターはこれを自ら実践に移している。

偉業の一つに聖書のドイツ語訳がある。それまで聖書は庶民からは程遠い聖職者だけの専有物であったが、これのドイツ語訳を発行し世に広めた。時もグーテンベルクの印刷機の発明もあって、他の宗教的パンフレットと共に一般に流布したのだ。自身、当時の印刷機のレプリカを見たことがあるが、ブドウの絞り機からヒントを得たものだ。

いくつかの宗教裁判の果てに当然のごとく破門されたが、ついに処刑されなかったことが幸いした。それまでは、破門即処刑だったが、宗教的審判と処刑が分離され、更には、サポートする領主が現れたことが幸いした。(2020.7.19 完)

海外便り

スペインバスク地方・フランス南西部俳柳紀行(4)

元 JICA シニアボランティア
北垣　勝之

通(つう) が来る興味尽きないトゥールーズかな

音に聞くヴィクトル・ユゴーは熱気充満

トゥールーズでの滞在は初めて、ここはミディ・ピレネーとラングドック・ルション地方を合わせたオクシタニー地域圏の中心都市で、フランスでは 3 番目に大きい(人口比、因みに北隣のヌーヴェル・アキテーヌ地域圏の首都ボルドーは 6 番目)。このフランス南西部はトリュフやフォアグラの産地として美食でも有名、かつサンチャゴ・デ・コンポステーラへの巡礼路沿いとあって多数の教会が点在する。概して鄙びた田園地帯の南西部はフランス最後の秘境とも言われている。このような地域を背景に発展著しいトゥールーズは、過去と未来の二つの顔を併せ持つ面白い街である。

歴史を感ずる旧市街を中心に新興住宅や近代的産業が郊外へと広がる。広域人口は約 100 万、狭域だと約 50 万人である。ここに三つの大学と、エアバス本社工場や航空宇宙基地があり四囲の農業地域とは極端に異なる。元はと言えばガロンヌ川と運河で大西洋と地中海を結ぶ交易の中継点として栄えた街である。旧市街の中心はキャピトルと呼ばれる市庁舎、周囲の建物の色も白と渋いベージュ、そこから「バラ色の街」とも言われる。同じ 12C に完成したサン・セルナン教会は、ロマネスク建築としてはフランス最大で巡礼の教会としても有名である。雨の中、私達が訪れた時は丁度、古色蒼然とした聖堂内にパイプオルガンが響き渡り厳かな雰囲気が漂っていた。トゥールーズには異邦人も多く移り住み国際都市に変身しつつあるが、当地に住む日本人も現在 200 人位いるそうだ。

トゥールーズ駅前は工事中　　シテ(城塞)からピレネー山嶺遠望

ヴィクトル・ユゴー市場(肉類も豊富)　新市街に架かる虹(カルカッソンヌ)

旧市街の一角、キャピトル広場から徒歩 7 分位のところに大きな市場がある。フランスの詩人・小説家・劇作家で「ノートル・ド・パリ」や「レ・ミゼラブル」等を著したヴィクトル・ユゴー(Victor Marie Hugo,1802～1885)、グルマン(食いしん坊)として勇名を轟かせた彼に因み名付けられた市場である。ここは地元民や観光客にとって人気の場所で、腹を空かして尋ねてみたら店仕舞いの時間になるところだった。市場内のレストランで昼食を旨そうに食べている残客を横目に退出する。翌朝あらためて訪れ酒屋でロゼワイン 1 本ゲット(10€)、これは晩飯の折飲んだワインが気に入って、バーテンダーに銘柄と値段を聞きわざわざ買い求めに出掛けたわけである。だが近くのスーパーに立寄るとピンからキリまでたくさん並んでいる。安いのは 1 本 2€からある。「よっしゃ、2€と 10€とどう違うか飲み比べてやろう」と思いこれも購入、重たい土産を背負って旅を続けることになる。帰国後、賞味したら値段の差ほど風味に違いがないことが分かった。

価格は強いか弱いかアルコール度に比例しているようである。

ピレネー越えキセル巡礼完結す
積年の思い果てなき巡礼路

巡礼路の正式な起点はフランス内に 4 か所ある。北から順に、パリを発しボルドー経由のトゥールの道、ヴェズレーを発するリモージュの道、ル・ピュイ・アン・ヴレイを発しコンク経由のル・ピュイの道、そしてアルルからトゥールーズを経るトゥールーズの道である。その後はいずれもピレネーを越えスペイン北部に出て、終着サンティアゴ・デ・コンポステーラまで約 2 か月の徒歩の旅となる。これではきついのでピレネーからサンティアゴまで約 800 ㎞を踏破すればよしとするのが一般的な巡礼コースになる。しかし近年は終着地まで約 100km の最終区間だけを歩けば認定される簡易巡礼が盛んである。私の場合はさらにショートカット、聖ヤコブの遺骸が安置されているサンティアゴのカテドラルで以前ミサに参列したこと、そして今回トゥールーズのサン・セルナン教会詣でとピレネー越えを以って聖地巡礼を達成したことにする。とんでもないキセル巡礼である。

新雪のピレネー峠を越えて　　*小国を現代アートが飾るかな*
ここまで来ればアンドラだ　　山間の街にオブジェの展覧会

アンドラやタックス安しと観光客
小国に日本の未来占うや

ピレネー山脈の奥深い中腹(標高 1030m)、フランスとスペインそれぞれの国境に囲まれてアンドラ公国という独立国がある。面積は 468 ㎢、主要産業は観光・サービス・流通・金融で小さな都市国家といった感じだ。人口は 7.6 万人、GDP は 27 億 4 千万€、従って 1 人当り GDP は 3.6 万€である(数字はいずれも 2018 年)。首都はアンドラ・ラ・ベリャ(Andorra la vella)、元首はフランス大統領とウルヘル司教(スペイン側)の共同大公が司る。当地域の歴史を辿れば 839 年にウルヘル大聖堂の聖別詔書が認められ自治権が与えられたが、10 世紀頃から宗主のウルヘル司教とフォア伯爵(フランス側)の間で争いが起こる。しかし 1278 年両者は対等な封建領主権(徴税・裁判・徴兵)を共有しアンドラの共同領主となる。以降、スペイン側はウルヘム司教、フランス側はフォア伯爵からブルボン朝アンリ 4 世を経て代々国家元首たる大統領が継承することになる。そして 1993 年新憲法制定、アンドラ国として独立、同時に国連加盟国になる。小粒でも山椒の如くピリリッとした山国の存在を知る。

経緯はざっと以上の通りであるが、同公国は 2011 年まではタックス・ヘイブンであったこともあり輸入関税が低い。ために免税店に観光客が群がり押し寄せる。特に土日にはスペイン・フランスはおろか近隣国からも大勢の買物客が訪れる。交通の便は決して便利とは言えないが、公道は整備されており車でトゥールーズから 4 時間、バルセロナから 3 時間で来ることができる。公用語はカタルーニャ語であるがスペイン語・ポルトガル語、フランス語・英語も通じる。軍隊はないが公安警察が厳しく入出国を管理している。私たちが滞在したのは土曜日、市街の目抜き通りはブランド品を求めて散策する

家族連れや若者で溢れていた。スーパーストアーもあり、ビール(350ml 缶)は 0.5€、水ペットボトル 1 本より安く、SNCF 駅の有料トイレと同額である。早速ホテルでの寝酒用に購入する。果物から生鮮食品、総菜など何でもある。免税店でも高級品の品揃えが豊富だが、スペインから来たと思しき熟年夫婦はバーゲン品のリキュール瓶(7.9€)を買おうか買うまいか迷っている風、私たちと目が合って「買うなら一番の割安でなくっちゃ」と本音を漏らし笑う。月夜にイルミネーションの繁華街、路上ではバンドや歌手、大道芸などのパフォーマンスが賑やかに人々を惹き付ける。そして街の所々には芸術的モニュメント、カフェやレストラン、ここが山深き飛び地の小国である事を忘れさせる。丁度ピレネー越えの 1 泊 2 日は天候に恵まれ、バスでの移動はパノラマの連続であった。峠の辺りでは前日の積雪で徐行することもあったが、無事通行できたことは正に神様のご慈悲あればこそ、僥倖という外ない。

アンドラの目抜き通りに人多し　　*ピレネーから一路南下の田園地*
ひっそりとアンドラ行政府　　*モンセラット過ぎれば近しバルセロナ*

懐かしのグエル公園サグラダも
旅の締め土産買い物バルセロナ

旅の最終地バルセロナでの目的は三つ、一つはガウディに因んだグエル公園を散策すること。家内は初めて、私は 2 回目の訪問だが土地勘が薄れ通行人の中年男性に道を尋ねる。同じ方向なので一緒に歩きながら、ついでにカタルーニャ州の独立について問うてみる。彼は「何があっても独立しなきゃ」と強硬派、道が急な上りに差し掛かった辺りで「年寄りはゆっくり行くよ、有難う」、お互いアディオスで別れる。やっとの思いでグエル公園の入口に到着、懐かしき佇まいに安堵する。しかし相変わらずの人混み、それも世界各地からの観光客ばかりだ。昨日までは、あまり見かけなかったアジア系人種がうようよ、中には超派手な薄着で自撮り写真に夢中な若い中国人女性もいる。公園内からはあちこちで大きな声の中国語が聞こえてくる。園内所々で遺構の補修工事が行われている。観光名所の世界遺産の維持はどこも大変だ。小高い丘の一角からサグラダ・ファミリア聖堂が見える。まもなく完成の予定と聞いているが、もう来ることもあるまい。同じように眺めていたフランス人の若いカップルと写真を撮りっこする。晩秋のサンセットは早い、暮れなずむ公園を後に地下鉄を乗り継いで次の目的地に向かう。

二つ目は、スペインの米料理パエーリャを食すこと、バルセロナの老舗レストランを訪れる。海鮮の味がしみ込んで美味い。かつて本場バレンシアで食した時は少々オコゲがあり、それが正統と断じた家内シェフは、毎々硬めパエーリャを食卓に供してきた。実際はいろいろバリエーションがある。気がつけば店内に日本人客が結構いる。それも若者たちで何故か男女別、同性同士の仲間内グループのようである。

三つ目はカタルーニャ広場の‘El Cork Ingrés’というデパートで土産物の買物をすること、ここの地下はスーパー形式になっていて低価格と品揃いが売り、近くの観光客相手の地元市場より魅力的である。韓国から来たという青年が物色中、ディスカウント品ばかりカゴいっぱいに入れていた。私たちも負けじと選別に傾注する。これで良し、あとは空港に向かうだけだ。

サグラダやガウディの遺志も進行形　　思い出のカタルーニャ広場平和なり
日暮れてもグエル公園大繁盛

端境期 旅人(たびと) あちこち銭撒きに

欧州路人の往来多種多様

旅行シーズンとしては秋から冬へと丁度切り替わる時期、観光客はそう多くないだろうと高を括っていたが、確かに遠方からの旅客は少な目だった。でも近隣ヨーロッパ系観光客は多い。但しアジア系人種はめっきり減った感じだ。これは単にオフシーズンというだけでなく、それぞれの国の景気や経済事情、不穏な国際情勢の影響によるのではなかろうか。その中でツアー離れした個人自主旅行について二、三紹介しておこう。

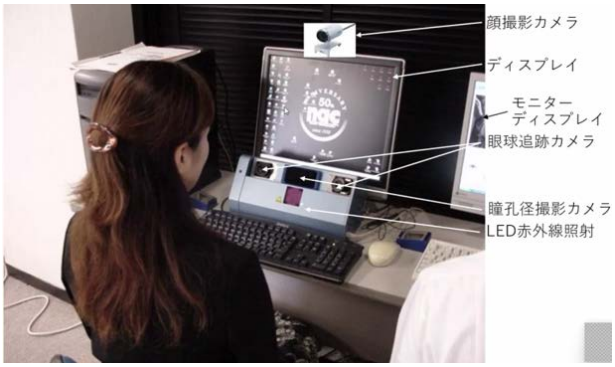
ビルバオのバスターミナルでバスを待っていたら、日本人らしき 2 組の熟年夫婦が何やら不安そうな表情で私のところにやって来た。「サンセバスチャンに行きたいのですが、発着掲示板に該当する便が出ていません」と尋ねる。ここはスペインでも独自性の高いバスク地方、行き先は現地の呼び名ドノスティア(Donostia)でしか表示されていない。彼等が迷うのも当然だ。大分県人の一人は 64 歳竹細工の職人さん、もう一人は 65 歳定年退職したばかり、皆さん外国語は分からない様子だがホテルもバスも全て日本で予約してのスペイン初来訪である。ご立派、よくやるよ。他方アンドラからバルセロナ行きのバスでは一人旅のアメリカ人と一緒だった。車中では彼が数か月前日本を訪れた際の写真がびっしり詰まったスマホを見せてくれた。短時日のうちに歩き回るのが上手い旅慣れたサラリーマン風の青年である。バルセロナのサンツ駅前に着いて私たちは下車、彼はそのまま空港に行くはずだが、別れの挨拶もそこそこに 15 分間休憩を運転手に確認して駅のトイレにまっしぐら、さすがに 3 時間ノンストップのバス旅はきつかったようだ。ところが翌日、私たちがバルセロナ空港で出会った日本人男性は、新婚旅行だというのに一人ぼっちで帰国するところだった。聞けば途中でパスポートを紛失、バルセロナの日本総領事館で仮旅券の発行手続きをしていたので遅れたとのこと。新婦は先に帰国、それにも拘らず本人はケロッとしている。今更くよくよしても始まらない。「いい厄落しになったね」と激励、二人の新生活に幸多かれと祈る。やれやれ、十人十色、人それぞれの旅がある。(続く)

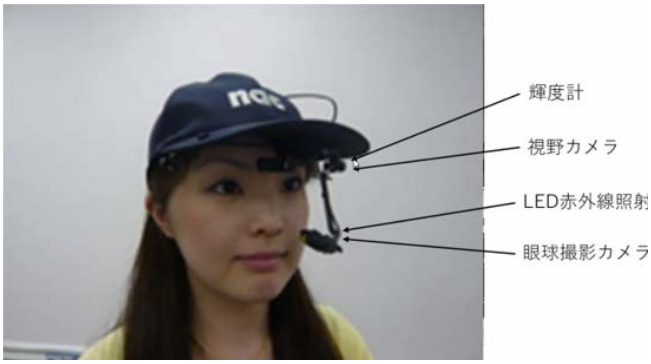
第 14 回 ICT 海外情報ウェブサロン模様

事務局

第 14 回 ICT 海外情報ウェブサロン(遠隔井戸端サロン)が 2022 年 7 月 30 日(土)19 時～21 時、ウェブ会議室において開催された。当会の倉島幹事による「瞳孔の動きは脳の動き」のプレゼンを題材にして、参加者からの活発な質疑・意見提起があった。主な話題を以下に示す。

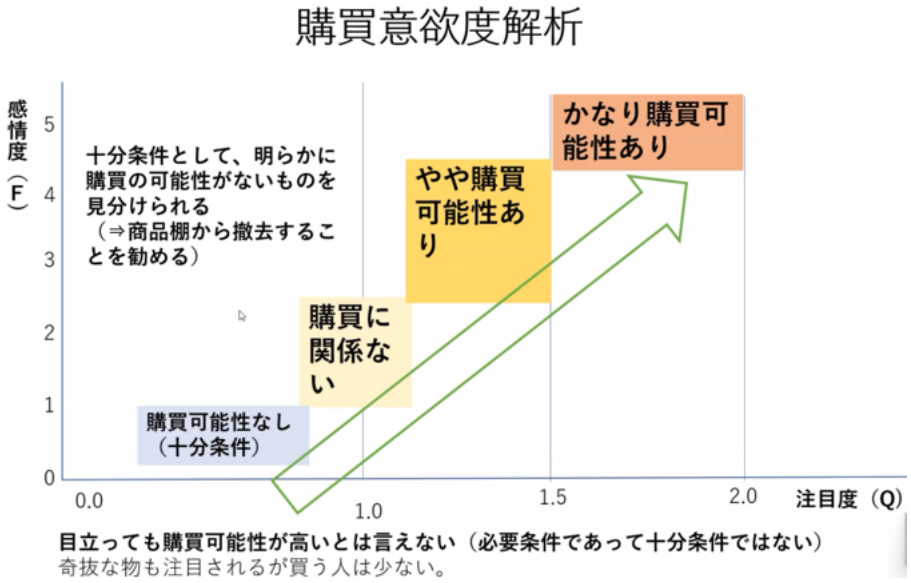
・瞳孔径の変化は無意識に情動を表わす。興味を持った情動が喚起されたりした状態では、瞳孔が大きくなる。一所懸命に問題に取り組んでいる時も瞳孔が開く。これらは意思とは無関係でコントロールは難しく、おそらく不可能である。猫が驚いた時に丸い目になるが、瞳孔が開いている典型例である。
・情動(emotion)は無意識な反応であり、感情(feeling)は意識的な変化が可能と定義している。
・瞳孔径を計測することにより情動反応を判定でき、顔の表情解析をすることにより感情反応を判定できる。これに関する研究論文は 57 年前に出ているが、事業化するのは初めてであろう。感性分析システムとして、特許取得済である。なお、人の眼がどこを見ているか計測するアイトラッキング(視線計測)は昔から存在しており、異なるものである。
・人が視認している情景、目の動き(瞳孔・視線の動き)、体の動き、身体温度変化、表情の変化を計測する方法として非拘束型システム(デスクトップ型)とゴーグル型システム(ポータブル型)がある。前者は、顔撮影カメラ、ディスプレイ、モニターディスプレイ、眼球追跡カメラ、瞳孔径撮影カメラ、LED 赤外線照射などで構成している。後者は、輝度計、視野カメラ、LED 赤外線照射、眼球撮影カメラで構成している。





・瞳孔径は光の明暗でも反応するので、それを除去するとともに、基準瞳孔径との比較により、注目度という指標を算出している。
・視聴者にとって、その番組のインパクト度合いが分かるものとして、視聴質(＝視認率×注目率×感情率)という概念を提起しており、特許取得済である。視認率は視聴率(テレビのチャネルがオン、録画含む)×アクセス率(視聴者の視線がチャネルにアクセス)である。注目率は画面を見ている注目度の大きさである。感情率は基本 6 感情(幸福、驚き、悲しみ、嫌悪、恐怖、怒り)の大きさである。
・テレビコマーシャルの注目度分布を調査したところ、左上の美しい女性に注目が集中し、右下の商品名には注目されていないこともあった。

・2 者択一等のアンケートがあるが、選択肢への注目度(率)を計算することにより、回答確信率を示すことができる。
・科学警察研究所に採用された。ウソ発見器の代わりになるかもしれない。
・応用範囲は非常に幅広い。
① 映画、テレビ番組、コマーシャル等の映像コンテンツ評価
② 商品評価(購買意欲度評価)
③ 空間デザイン診断
④ 学習システム評価(学習意欲度)
⑤ アンケート調査(回答確信度)
⑥ 脳活動のレベル測定(脳疾患、自律神経失調症)
⑦ 五感の反応レベル測定
⑧ 相性診断
⑨ ロボット応対診断(顧客測定)
⑩ 赤ん坊等の言葉を話せない人や動物の意思伝達
⑪ 犯罪者の判定
⑫ ドライバーの眠気、不注意状態感知
⑬ 労働安全衛生上の危険予知
⑭ 適性診断
⑮ 労働熟練度診断
⑯ 運動選手適性診断
⑰ ゲームエキサイト度診断
⑱ 映像コンテンツ選択優先度判定



・4 大学と共同研究しているが、今のところ民間企業は対応してくれない。ご一緒に研究していただける方をお待ちしております。

参加者から多数の質問・意見があった。瞳の色が違う外国人も同様に対応できるか、眼は進化しないのか、同様技術の研究者を知っている、心拍などはノイズとせずに利用できないか、政府の支援が必要ではないか、学生も研究機関には関心が低い、顔認証と組み合わせてはどうか、などなど。このように、予定の 21 時まで密度の濃い熱い意見交換があり、中締め後も個室歓談や全体歓談があり、真にウェブサロンの雰囲気であった。

編集後記(編集者から一言)

皆様のご協力をいただき、おかげさまで会報第 104 号を発行することができました。今回は当会の吉田顧問(東京大学名誉教授)から「Covid-19 で」の特別寄稿をいただくとともに、海外グラフィティ、スペインバスク地方・フランス南西部俳柳紀行のご寄稿を継続いただき、誠にありがとうございます。

これまでのご協力に改めて心より感謝するとともに、当会及び当会報へのご感想、ご意見などございましたら、下記サイトにご記入いただければ幸いです。皆様からのさらなる会報へのご寄稿と ICT 海外情報ウェブサロンへのご参加をお願いするとともに、今後とも当会へのご指導・ご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

https://ictov.jimdo.com/コメント/

発行：　ICT 海外ボランティア会(ICTOV)
会報担当：　空席のため募集中（編集長兼広報部長)、山川　博久(事務局長)
ホームページ担当：　山崎　義行(報道部長)、安達　信男(幹事)